●第25回巡検報告「－高知市北部の色々な岩石－」●

森岡　美和

去る１２月９日（日）寒い折でしたがお天気にも恵まれ、高教研理科部会地学との合同企画ということもあり、巡検には１８名（内高知地学研究会参加者１３名）の参加がありました。高知市北部には秩父帯（黒瀬川地帯）が分布し、地下深所からもたらされた岩石や、付加帯の堆積岩・火成岩類など様々な年代の岩石を狭い範囲で観察することができます。

観月坂に集合した一行は、車を乗り合わせて早速第一見学地の円行寺の採石場へ。露天掘りの巨大な蟻地獄状の露頭のてっぺんで、東洋電化工業の羽方さんの説明を聞きました。採石は主に敷石混在用・造滓剤・脱硫剤・耐火用・肥料用として使用されるとのこと。しかし、今後は２～３年後に採石を終了するであろうということでした。この円行寺の岩体（黒瀬川構造帯に属する）は、鉱物組成等の研究から、上部マントルのかんらん岩から少なくとも４ステージを経て現状に至っていることがわかっています。吉倉先生の説明の後、採石場に降りて変成蛇紋岩の部分と、一部変成を受けにくかったかんらん岩質の部分の重さを比較したりしながら岩石採集しました。蛇紋岩を見慣れていない方々もいて、名前の由来にもなった風化したときの蛇の鱗のような模様を、見た目や手触りで確かめました。

集合写真（背景は変成蛇紋岩の露頭）：谷内康浩氏撮影

続いて，柴巻の八畳岩に移動し，龍馬が叔父の田中良助と酒を酌み交わしたと言われるチャート岩体（秩父帯・このブロックの周辺は砂岩泥岩の互層が分布している）の上から高知平野を見下ろしました。筆山や高知城などの盛り上がりの向こうに太平洋が広がり、その水平線が空の雲に続くのを見ながら，龍馬の大きな計画がこういった環境のもとで育っていったのではないかと想像したりしました。その後、すぐ下にある田中邸（現在市の市跡に指定されている）を訪れました。

お昼近くなり、土佐山大穴峡に移動した一行は、川向こうの石灰岩断崖（「2億数千万年前のハワイ」という吉倉先生の名言あり）を眺めながら弁当を広げました。その後河原の石を種類分けして「岩石を見るときは女人と同じで、色に惑わされるな!」と助言をいただきながら広げた新聞紙の上に違う種類の岩石を並べていきましたが，人によって集めた石の大きさも様々で、人柄が現れると大笑いでした。

更に川上の梶谷橋付近では、転石の中からフズリナ石灰岩（ペルム紀）を採集しました。なにぶん数㎜～１㎝くらいしかない化石ですので、老眼を細めながらの方も多かったのですが（失礼)、しかし寒風をものともせず、黙々と探しました。

最後に宮ノ前の河原で枕状溶岩を観察しました。高知県では、室戸などの海岸で見られるものが美しく有名ですが、ここも比較的新鮮な露頭で、玄武岩特有の色や発泡の跡が観察でき、海底噴火による餅を積み重ねたときのような独特の形が確認できました。こうした堆積岩の中に見られる緑色岩のブロックは、四国が付加帯であることを強く感じさせる

ものです。龍馬も大きいが，プレートテクトニクスはまさに壮大！といったところ。

帰り道、円行寺まで戻った一行は、近くの牧場で搾った乳から作っているアイスクリームを食べて、頭もお腹もすっかり満足して解散しました。